山梨県南巨摩郡における在郷七面堂建築について

— 鯉沢町明神および十谷七面堂・早川町大原野七面堂の事例研究 —

ON SHICHIMENDO-HALLS BUILT IN VILLAGES IN MINAMI-KOMA COUNTY
OF YAMANASHI PREFECTURE— Myojin and Jukkoku Shichimendo-halls in Kajikazawa town
and Oharano Shichimendo-hall in Hayakawa town —

渡辺 洋子*

Yoko WATANABE

Shichimen-Goddess is said to be a guardian deity of Kuonji-Temple of Nichiren-Sect. Main shrine of Shichimen-Goddess is situated near the top of Mt. Shichimen, south-west to the Mt. Minobu. The style for main shrine of Mt. Shichimen is called "Shichimen-Zukuri", one of variations derived from "Sengen-Zukuri".

In Edo Period, after the middle of the 18th Century, Shichimendo-halls which were dedicated to the Shichimen-Goddess, were built in villages along Fuji-River, in Minami-Koma County, Yamanashi Prefecture. The forms of these village Shichimendo-Halls, however, are not exactly the same as the "Shichimen-Zukuri".

This paper focuses on statements of the present forms of Shichimendo-Hall examples, and their reconstruction forms, deduced from their reform-traces. Moreover, the aim of this paper is to clarify a tendency of plan transition of village Shichimendo-Halls.

Key words: Nichiren-Sect, Shichimen-Goddess, Shichimen-Zukuri, village Shichimendo-Halls, reconstruction, Edo Period

日蓮宗, 七面神, 七面造り, 在郷七面堂, 復原, 江戸時代

1. はじめに

本研究は日蓮宗身延山関連建築のうち、近世に南巨摩郡の富士川流域の地域に建設された在郷七面堂建築の調査結果に基づく論考である¹⁾。七面堂建築とは、日蓮宗の守護神である七面大明神（七面天女）を祭祀する堂宇であり、身延山の南西に位置する七面山に七面山本社（敬慎院）がある。七面神信仰が民間に流布した江戸中期以降、江戸²⁾や京都³⁾に七面堂が建てられ、甲州でも南巨摩郡の富士川流域を中心として何棟かの七面堂建築が建設された。本稿では特に、山梨県史編纂事業の一環として平成5年度および8年度に実測調査をおこなった鯉沢町の二棟、早川町の一棟の七面堂建築⁴⁾について、現状での構造・意匠形式および棟札記載の内容を検討し、可能な限り建立当初及び中古の復原を試みる。その上で、これらの建築の形態的な特徴と、建立以降の改造について共通する傾向を明らかにしたい。なお、これに先立って七面堂建築の性格を把握するために、日蓮宗と七面神信仰、鬼子母神・十羅刹女信仰と七面神信仰、七面山本社の建築について論じた。

甲州において七面神を祀る堂宇や祠などのうち、現存するものを整理すると、おおむね次のように分類できる。

- I. 本堂、祖師堂ほか他の堂宇に、共に七面神を祀るもの。
・甲府市妙詮寺⁵⁾（現在本堂に七面神を祀る）など
- II. 供養塔あるいは石の小祠に祀るもの・鯉沢町明神供養塔など

III. 七面堂（七面明神社）・七面神を祀る独立した堂宇のうち仏堂形式のもの、富沢町弘円寺七面堂など

IV. 七面堂（七面明神社）・七面神を祀る独立した堂宇のうち仏堂形式以外のもの この一つが土蔵造りの堂⁶⁾で、増穂町妙法寺七面堂・鯉沢町天戸七面堂など

本稿で対象とする3棟はこのうちⅢに該当し、現存する七面堂としては主流をなすものである。調査建築3棟は以下の通りである。

- ①明神七面堂、山梨県南巨摩郡鯉沢町明神町、宝暦5(1755)年建立
- ②十谷七面堂、南巨摩郡鯉沢町十谷桜畑、文久元(1861)年建立
- ③早川七面堂、南巨摩郡早川町大原野、文久2(1862)年建立(再建)

なお本稿における対象建築の名称は山梨県教育委員会の「文化財一覧表」に従うものである。戦後管轄機関が変更されるまでは、各々所属する日蓮宗寺院の名を冠して称されていた。各建築の位置と寺院名を図1に示す。

- ①鯉沢町明神（感応寺）七面堂
- ②鯉沢町十谷（妙長寺）七面堂
- ③早川町大原野（建長寺）七面堂

図1. 調査建築所在地

* 職業能力開発大学校建築工学科 講師・工博

Lecturer, Dept. of Architectural Engineering, Polytechnic University, Dr. Eng.

2-1. 日蓮宗と七面神信仰

七面神信仰の伝説はかつて日蓮が文永11年(1274)からの九年間、弟子達とともに隠栖生活を送った地、身延に始まる。先行研究としては中尾堯氏による「七面山の信仰」⁷⁾および林是智氏による諸研究⁸⁾そして『身延町誌』⁹⁾などに詳しいので、以下に要約する。

建治3年(1277)9月の頃、日蓮聖人が説法をしていると、参詣聴衆の中に若く美しい女性があり、日蓮が「本来の姿になれ」といって花瓶の水を与えると、彼女は長さ一丈あまりの竜に変身してみせた。竜はまた美女の姿に戻り、身延を守り、一乗信受の者の所願を叶えると誓うと七面山に去ったと伝えられている。七面山は山梨県南巨摩郡にある標高1982mの山で、身延山の裏鬼門、南西に位置している。このうち永仁5年(1297)に身延山開基の大壇越、波木井実長と六老僧日朗とが七面山に登り、七面天女を祠ったとされ、9月19日を開創の日として現在も大祭を行っている。

しかし前述の先行研究によれば、史実として身延山鎮守の七面大明神が育成されたのは身延十四世日鏡・十五世日叙・十六世日整の頃と推定され、さらに史料的に七面大明神が明らかになるのは、近世に入った天正20年(1592)からである。この年大坂雲雷寺の開山、日宝が『曼荼羅本尊』を書き、「七面大明神」を勧請した。先の七面天女影向、即ち出現の伝説は室町時代に編纂された日朝による日蓮伝『元祖化導記』ではなく、近世初頭天正20年の日宝による曼荼羅によって初めて七面天女が勧請されたという史実から、七面山の信仰が身延山に取り込まれた時期は中世後期から近世初期にかけてとするのが現在定説となっている。さらに文禄5年(1596)には、身延十八世日賢が「七面大明神宝殿常住之守護本尊也」と認め、七面大明神の宝殿が造営されたことが明らかである。すなわち16世紀末になって七面神を祀る建築の存在が確認できる。また身延二十四世日要の条には初めて七面山別当の語が見える。16世紀末から17世紀初期にかけて身延山久遠寺は日蓮教団の代表的立場になり、守護神の七面大明神の位置も高まっていった。17世紀前半には七面山の女人禁制も解かれ、後半になると京都深草山をはじめとして地方にも七面大明神が祠られるようになった。そして延宝3年(1675)、身延三十世日通の代に七面山では仏教寺院に付設された神社建築として、本殿・拝殿・庫裏・客寮等の諸堂が新築・改築され堂塔伽藍が整備されるに至った。これが七面山本社(敬慎院)である。後の安永5年(1776)10月12日夜、火事によって堂宇は全焼した¹⁰⁾が、大火から4年後の安永9年(1780)に身延四十七世日豊は四間四方の本殿を七面山に再建立した。続いて天明4年(1784)から翌5年にかけて、七間半×五間の拝殿、四間×三間の幣殿を再建成就した。これを「七面造り」と呼んでおり、七面山の頂上近くに東面して建っている。

2-2. 鬼子母神・十羅刹女信仰と七面神信仰

日蓮は法華經の守護神をその信仰体系の中に包摂し、曼荼羅に勧請した。具体的には梵天・帝釈・天照大神・八幡大菩薩・四天王をはじめ一切の諸天、諸菩薩である。丹羽博亨氏の研究¹¹⁾によると、日蓮の日天・月天に対する行儀は日蓮没後、弟子たちに継承され、諸天善神信仰の場はその後天経・天堂・三光堂へ発展したとしている。また十羅刹女は道場神、つまり寺院の守護神として重要視され、十羅刹堂が伽藍の主要堂宇として建立されるようになる。十羅刹女と対峙する守護神が鬼子母神である。さらに、日蓮の考えは弟子の日像によって三十番神信仰へと結合されていった。

近世の日蓮宗寺院においても、北辰(北斗星)の本地を祀る妙見宮、羅刹堂、鬼子母神堂、三十番神社などが建立され、信仰を集めた。このうち七面神と最も関係が深いのは十羅刹女および鬼子母神である。宮崎英修氏によると¹²⁾、鬼子母神は古くから天台・真言兩宗の間に崇拝されてきたが、実質的信仰は鎌倉末頃から次第に日蓮宗へと移り、日蓮宗において当初、十羅刹女を主とする信仰体制であったが、やがて鬼子母神は十羅刹女の母であるという解釈が成立したとしている。さらに江戸時代に七面信仰が流布すると、七面神の本地が鬼子母神であるとして、七面神は教法的地位の確立に至った。

3. 七面山本社の建築について

七面山本社は山上の境内とともに身延山久遠寺の所有である。堂は敬慎院とも呼ばれるが、敬慎院は元来七面山別当の別当所を指す。中尾堯氏の研究¹³⁾によると七面山山頂には、もともと山麓の雨畑村の村民が「池の大神」を祠る社があり、そこへ身延山が七面天女を勧請することになり、これを期に身延山久遠寺は七面山への支配を開始したとしている。延宝3年(1675)、七面山の堂塔伽藍が整備されると、久遠寺と七面山頂の中継点に位置する赤沢集落が山上への物資の調達、参拝者の接待などの役割をにない、繁栄した。

『身延山諸堂記』¹⁴⁾によると、大火のあと安永9年(1780)に七面山に再建された本殿(本宮)宝珠殿、天明4年(1784)から翌5年にかけて再建された、幣殿および拝殿が七面神社の本社であり、敬慎院伽藍の中心をなす。棟梁は池上勘解由である。安永5年に焼失する以前の規模は、本殿(本宮)が三間半×四間、幣殿が二間半×二間、拝殿が六間×四間で、再建されたものより一廻り小さかった。火災焼失後、前身建物より大型化した建築を建て直したのである¹⁵⁾。

現在、七面山本社の拝殿は千鳥破風によって、ほぼ十字形の屋根伏形式となり、その先に唐破風の向拝が付けられている。本殿は向拝を欠くが、基本的には拝殿とほぼ同様の形態を採る。「七面造り」という建築形式は屋根伏が十字形になることに特徴がある¹⁶⁾。

図2.『建築大辞典』による七面造りの挿絵

写真1. 七面山本社 外観

『建築大辞典』によれば、「七面造り」は江戸時代に生まれた神社建築様式の一つで浅間造りの変形であると定義されている¹⁷⁾。同書には平入り、入母屋造りの屋根上に方形造りの楼を載せる形式とあり、楼つき二層の建築立面が描かれている。楼の正面に千鳥破風、両側面に軒唐破風を設けるためかなり特殊な姿である。下層はほぼ同じ形で、二層目に流れ造りの屋根をかけるのが浅間造りであり、富士宮市の富士山本宮浅間大社(慶長9年=1604)がこの例である。二層目の相違だけでよく似ているため、「七面造りは浅間造りの変形」としたのであろう。七面山本社の建築には楼がなく、千鳥破風は直接屋根に設けられるが、七面山研究ではこれを「七面造り」と呼んでおり、七面造りにもいくつかのバリエーションがあると理解できる。なお現在の七面山本社において拝殿は檜皮葺き、幣殿および本殿は従来の檜皮葺きから明治18年に銅板葺きに改修された。これらは昭和41年に身延町の町指定文化財に指定されている。

表1.『甲斐国志』に見る七面堂等の記載

地域	『甲斐国志』 出典	寺院名	所在 (現市町村名)	本末関係	記載	七面堂 の有無
府中	仏寺部第一	藤光山 法華寺	細工町 (甲府市)	武州池上本門寺ノ末(末頭ニテ 本州ニ在ル一派ノ小本寺)	三十番神・七面明神・松尾ノ神像 拝殿 下陣ニアリ額ハ宝鏡院ノ宮ノ筆	
府中	仏寺部第一	法珠山 妙詮寺	白木町 (甲府市)	武州池上本門寺ノ末	鬼子母神・七面明神堂アリ	有
府中	仏寺部第一	上行山 要法寺	元柳町 (甲府市)	京都本園寺ノ末(州中ノ末頭)	七角鏡 七面明神ノ神影トス慶安五壬辰 五月銘アリ	
山梨郡 中郡筋	仏寺部第六	宝塔山 遠光寺	遠光寺村 (甲府市)	身延久遠寺ノ末(釜無川以東ノ 諸末寺ハ皆ナ当寺ノ触下)	座敷・廊下・経堂・七面堂・番神堂・堂 唱堂・鐘楼・二天門・表門アリ	有
山梨郡 中郡筋	仏寺部第六	法珠山 常光寺	下今井村 (甲府市)	遠光寺村遠光寺ノ末頭	七面堂 日宗勧請スル所ト云常光寺開山 ハ日宗建治三丑年	有
巨摩郡 逸見筋	仏寺部第十一	定栄山 遠照寺	穴平村 (須玉町)	身延ノ末	仏殿・客殿・鐘楼門・番神堂・題目堂・ 七面堂等備レリ	有
巨摩郡 武川筋	仏寺部第十二	清水山 妙浄寺	上円井村 (韮崎市)	身延ノ末	寛文五年乙巳徳島渠ヲ作ル此ノ時水口ニ 七面堂ヲ起立ス	有
巨摩郡 武川筋	仏寺部第十二	妙法山 蓮照寺	白須村 (白州町)	身延ノ末	本尊ハ七面大明神	有 (本堂)
巨摩郡 西部筋	仏寺部第十三	高峯山 妙了寺	上市野瀬村 (櫛形町)	身延ノ末頭(三箇ノ触レ頭也)	三十番神・七面明神ノ社・鐘楼	七面明 神社有
巨摩郡 西部筋	仏寺部第十三	恵命山 蓮花寺	鯉沢村 (鯉沢町)	鎮中条村長遠寺ノ末	慶長十六年身延二十一世日遠今ノ名ニ改 ム七面ノ神像ハ日朗ノ作ト云フ	
巨摩郡 西部筋	仏寺部第十三	徳栄山 妙法寺	小室村 (増穂町)		本願所等備ルハ西峯トテ後山ニ七面明神 ノ宮アリ山上十町許リニ関伽ノ池 里人 峰ノ湖トモ呼	有
巨摩郡 西河内領	仏寺部第十五	長栄山 本國寺	下山村 (身延町)	身延ノ末	七面明神堂	有
巨摩郡 西河内領	仏寺部第十五	大野山 本遠寺	大野村 (身延町)		七面堂・鐘楼堂・二王門等額ル宏麗ナリ	有
都留郡 郡内領	仏寺部第十七 ノ下	持名山 蓮華寺	大嵐村 (足和田村)	身延山久遠寺ノ末	七面堂三間四間半	有

4. 甲州における在郷七面堂建築について

甲州の身延山以外の地域に、個別に七面神が勧請され、七面堂が建立されるようになったのはいつか。『甲斐国志』(内閣文庫蔵)の記載¹⁸⁾に基づいて、表1にまとめる。同書は文化2～11年間(1805～14)の編纂であり、その時点での七面堂についての記録である。表1中の寺院は、妙法寺、本遠寺など、かなり大寺院、名刹が多い。また本稿で調査対象とした七面堂が所属していた寺院(感応寺・妙長寺・建長寺)について調べると、『甲斐国志』に寺院名の記載はあるが、その項目に文化年間にはすでに建立されていた明神七面堂および早川七面堂(宝暦の建築)の記載が見られない。すなわち『甲斐国志』に掲載された七面堂は主だった寺院のものを中心としたらしく、実際の七面堂の数はこれより多い数であったと推定される。

表1中の七面堂のうち、下今井村の常光寺は建治3年(1277)の開山で、七面堂も開山祖である日宗により勧請されたとある。ところが前述のように、七面神信仰が顕在化するのが天正年間であることを考えあわせると、これは伝承を記録したにすぎないのではないかとと思われる。これと同様なのが鯉沢村蓮花寺の七面神像であり、日朗(1245～1320)の作とあるが、伝承の域を出ていない。

その一方、上円井村の妙浄寺が渠建設の寛文5年(1665)に、水口に七面堂を起立したという記載は、七面神が在郷の龍神信仰(「池の大神」と結びついた七面山の縁起そのものに通じるところがあって、信憑性が高いと考えられる。妙浄寺七面堂も当初は龍神の祠であった可能性があるが、やがて七面神信仰が取り込まれたものであろう。この他、慶安5年(1652)の七角鏡の銘があり、七面山に近いだけに、甲州各地の寺院に最初に七面信仰が取り入れられ始めたのは、17世紀後半であったと推察してよいだろう。なお、表1中の七面堂建築は、当時の建物としてはすべて失われている。

5. 南巨摩郡における七面堂建築

実測調査を行った七面堂建築は小規模な仏堂の形態をとり、必ずしも前述の七面造りのように、大棟が十字に組まれた屋根構成をと

らない。しかしながら本殿の前に拝殿、あるいは幣殿および拝殿を設けるといった七面山本社の社殿形式を採る場合があり、その際本殿は「七面堂」の他に「七面明神社」とも呼ばれ、二天門や拝殿に「七面宮」の篇額が掛けられる。調査対象とした鯉沢町明神七面堂、土蔵造りの例として挙げた鯉沢町天戸七面堂がこの例である。また社殿形式をとらない七面堂であっても、参道に鳥居を設け、神仏習合の形をとる。調査対象建築について、構造・意匠の形式を表2に示す。ここでは各七面堂建築について、建物現状および復原調査から内容を述べたい。

表2. 調査対象七面堂建築の構造・意匠形式

建築名	明神七面堂	十谷七面堂	早川七面堂
基本構造 桁行×梁間 屋根・材料 向拝 破風	3間×3間 入母屋造 檼瓦葺 檼一間 無	1間×1間 入母屋造 鉄板葺(敷) 無	3間×3間 入母屋造 鉄板葺(敷) 1間 無
基礎・基礎 礎石 礎石 礎石 礎石	有切石 有切石 有切石 有切石	有切石 有切石 有切石 有切石	無切石 礎盤あり 有
輪部 柱形状 柱 柱 柱 柱	円柱 円柱 円柱 円柱	円柱 円柱 円柱 円柱	円柱 円柱 円柱 円柱
組物 組物 組物 組物	三手先 三段(隅) 有有有 有有有 有有有 有有有	三手先 三段(隅) 有有有 有有有 有有有 有有有	三手先 三段(隅) 有有有 有有有 有有有 有有有
中備 外廻り 内廻り	本葦股 衰束	詰組 出三斗	詰組 出三斗
軒 妻飾り	二軒繁垂木 二軒繁垂木	二軒繁垂木 二軒繁垂木	二軒繁垂木 二軒繁垂木
縁・高欄 縁 高欄	切目縁 (敷・縁以外) 切目縁(敷) 腰組付 無(当)	切目縁 擬宝珠高欄	切目縁 無
向拝 柱 組物 備木(軒) 垂木(梁) 繋虹梁 手挟	唐戸面 斗 透三斗 一軒繁垂木 有龍彫り	無 無 無 無 無 無	几帳面 斗(二枚) 透三斗 一軒繁垂木 海老虹梁 龍彫り
床 内陣 外陣	畳敷 板張(縁端) 畳敷	畳敷	畳敷(縁端) (縁端) 畳敷 板張
天井	折上格天井 龍天井(須弥壇上)	格天井	格天井(龍) 鏡天井(龍)

5-1. 明神七面堂の建築と復原

明神七面堂は旧駿州街道（現国道52号線）に沿って、鰍沢町の中心街を南に下り、南川橋を渡った明神町の西側の山腹にある。街道から石段を登って鳥居をくぐり、感応寺の裏をまわって二天門を通り、さらに急な石段を登ると七面堂の境内となり、現在の拝殿と本殿が正面に建つ。境内には他に稲荷堂と鐘楼がある。本殿の建築は棟札によれば、「本社建立寶曆第五乙亥年四月十九日 鰍沢村眞龍山感応寺第九世本立院日如代」とあって宝暦5年(1755)の建立であり、施主は鰍沢村中、棟梁は身延の池上民部宗家と池上角之丞宗中とわかる。富士川舟運が隆盛にむかいつつあった宝暦年間に村民たちによって建てられたもので、身延山の宮大工池上家による本格的な建築であり、昭和42年に鰍沢町の文化財に指定された。

本殿は現在棧瓦葺、当初桧皮葺の入母屋造り平入りで、桁行三間（柱間）、梁間三間の仏堂形式をとる。前面に一間の向拝を持ち、四周に縁を廻して、東面して建つ。

斗拱は三手先尾垂木付組物を用い、尾垂木には龍と鳳凰、獏、板支輪には雲と波の文様が刻まれる。中備は十二支を題材とする本墓股で、三間四面の合計12の柱間に各々一具ずつ、正面中央を卯（東）とし、各方向を向いて順番に配置されている。向拝の中備墓股上部には龍の彫刻が、また墓股裏側には一角獣の彫刻が配されている。

縁下は縁束によらず腰組の四手先斗拱を用いているが、現在、四手先目の肘木下に支柱を補っている。また縁先回りに建築を保護するための外周壁と建具を設けており、縁床は建物背面の部分を除き、元来の切目縁の上に樽縁で新しい床を重ねている。建物正面部分の赤い塗装とともに、これらは近年の改造である。

内部は内外陣に分かれ、来迎柱には金箔を用いた彩色が施され、その上部には花肘木を設けるなど、かなり装飾性が高い。外陣の天井は折上格天井に一間一花の蓮華文（宝相華）と鏡文が描かれ、内陣の鏡天井には須弥壇上部に七面天女が描かれる。頭貫より上には極彩色が施されている。厨子は様式的に宝暦の堂建立とほぼ同時期と考えられるもので、扉には七面神の象徴の植物である沢瀉（おもだか）の文様が陽刻される。内部の改造としては内陣奥の両側面に設けられた連子窓をふさいで、ここを壁としていることが挙げられる。

この七面堂は山梨県の近世社寺調査以前、昭和10年(1935)にも調査され、『鰍沢七面堂の建築』というガリ版刷りの報告書が刊行されている¹⁹⁾。同書によると、ここに祀られる木像の七面天女像について①鰍沢村経王寺十四世日悦が拝持していた像を、その弟子であった十七世日現が後に本尊として祀ったものであること、②日現の在職中（元文元年＝1736～明和元年＝1764）、延享元年(1744)頃火災があったために、その後現在の場所に遷座したこと、③寛延4年(1751)鰍沢の船方中を施主として七面隨身門を再建し、その尊像は商人中によって作られ、隨身の開眼説法を勤めたのも日現であること、等を指摘している。宝暦5年は日現の在世中にあたり、年代的にもつつまがあう。なお経王寺は感応寺と同じく、日蓮宗小室山妙法寺の末寺であり、現在国道52号線東側、鰍沢町の中心街区にある。

次に明神七面堂の伽藍であるが、もと拝殿・幣殿・本殿の形式をとっていたことが、聞き取り²⁰⁾および史料²¹⁾から明らかである。もとあった拝殿は史料によると実長で五間四尺二寸×五間三尺の大きな建物で、小室山妙法寺にあった修験道の修行場を移築してきたとされる。この拝殿は戦後に解体して明神町公民館として再移築し

写真2. 明神七面堂本殿外観

写真3. 本殿尾垂木

写真4. 本殿内厨子

写真5. 明神七面堂拝殿外観

た。拝殿としての姿は茅葺の入母屋造りで、縁があり、蔀戸が用いられていたという。拝殿を解体・移築し、幣殿を取り壊したあと、伽藍内にあった日朝堂を拝殿あとに移築した。これが現在の拝殿である。拝殿として使用できるように、建物後方中央の壁を取り払った痕跡を認めることができるが、現在は破損が著しい。幣殿および旧拝殿の向拝の礎石は、現在も敷地内に残っている。

図3. 明神七面堂本殿
現状平面図

図4. 明神七面堂本殿
復原平面図

5-2. 十谷七面堂の建築と復原

鰍沢町十谷は、国道52号線を南下し、富士川の支流である大柳川にそって西に入り、溪谷を進んだ所にある集落である。十谷七面堂は十谷集落のいりくんだ道を抜け、十谷温泉に向かう途中から、山の急斜面を登った場所に位置している。室内には厨子に納められた七面天女像が祀られ、また棟札1枚、奉納札2枚、祈禱札1枚が保存されている。棟札によると、「維時文久元酉十一月大吉日 自在山妙長寺前廿五世本好院日運 時ノ住持第廿六世本旭日海」とあって文久元年(1861)の建立であるとわかる。棟札に記載された大工棟梁は柳川村（現鰍沢町柳川）の甚右衛門、および黒桂村（現早川町）の豊兵衛である。現在の七面天女像は木像で、身延の仏師池上岡次郎の明治29年の作である。この建物は昭和57年に鰍沢町の文化財に指定された。

室内に保存される奉納札のうち1枚は天明5年(1785)、十谷村の深澤重左衛門による家内安全祈願のもので、札の裏に「中古天正式年當村深澤重左衛門先祖身延山ヨリ迎ヘシ 右本年當村世話人ノ丹精ヲ受ケ堂宇ヲ建立ス」とある。すなわち天正2年(1574)に深澤重

図5. 十谷七面堂 断面図

図6. 十谷七面堂 正面立面図

左衛門の先祖が身延山より迎えた本尊のため、天明5年に村人の尽力によって堂宇を建立すると書かれている。現在、十谷七面堂はこの奉納札記載に基づいて、「天正二年七面神勧請、天明五年七面堂建立、文久元年再建」とされている²²⁾。ところで前述のように七面神信仰に関する先行研究から、七面大明神の勧請が史料的に明らかになるのは、近世に入った天正20年（大坂雲雷寺日宝による『曼荼羅本尊』への七面大明神勧請）からであると指摘される。そのため天正2年に十谷村の深澤重左衛門先祖が本尊を勧請したとすれば、これは非常に早い事例ということになる。ところがこの奉納札の裏書きは、少なくとも天明5年に過去のことを記録したものであるため、誤記あるいは誤写を疑ってみる必要があると思う。ただし現建築は文久元年の再建であり、これは建物の装飾形式からしても確実である。

本殿は現在鉄板葺、当初茅葺で、入母屋造り平入りの一間仏堂である。向拝はなく、東面して立つ。斗拱は三手先尾垂木付組物、通肘木間には板支輪が組まれ、波と雲を中に刻んだ格狭間が付けられている。尾垂木は隅柱に上から鳳凰、息、龍、平柱に鳳凰、象の彫刻となっている。中央斗拱を挟む形で外廻り、正面（東）に麒麟、南に唐獅子、西に白虎、北に玄武の板葺股が各面に二具ずつ配置されている。内廻りには角付板葺股が組まれ、内部の天井は格天井に一問一花の花文が描かれている。ただし建物背面（西）は崖下のため建築に傷みがあり、外回り葺股上の通肘木から上部は破損し、失われている。中央の斗拱を欠き、新しい軒天井に替えられている。

現在、十谷七面堂は須弥壇を納めた張出し部分が後方の縁に突き出した状態になっている。前述のように、建物背面（西）にあたるこの部分に外回りの改造が集中しているが、室内に関しても以前

写真6. 十谷七面堂 外観

写真7. 十谷七面堂頭貫の圧痕

の状態を知る痕跡を見いだせる。須弥壇の上、頭貫にははっきりとした圧痕が残る。これは今、須弥壇の中に納められている厨子の棟の形状に一致し、かつて厨子は堂内にあって、その棟の後端部分がここに突きあてられていたと考えることができる。

現在、頭貫の下に内法長押が回されているが、須弥壇の左右にある角柱の部分で内法長押は途切れる。須弥壇の上、つまり角柱間には渦と若葉の彫物がつけられた虹梁が渡されており、拳鼻がつけられている。角柱は頭貫の下端までの高さである。そして厨子の棟の圧痕はこの渦・若葉の虹梁にはまったく残っていない。すなわちこれらの角柱と拳鼻、内法長押、虹梁の各部材は、後補材であると推察されるのである。

次に須弥壇の突出のない時期に七面堂背面の柱間装置は何であったかという問題が残る。背面を構成する二本の円柱には板壁の痕跡があるものの、これは前述の角柱にも対応する板壁痕跡が残るので、現在は棚になっている部分が中古段階で板壁であったことを示す可能性が残る。しかし背面の敷居には溝がなく、建具を納めた可能性は低い。従って、やはり壁と考えるのが最も妥当であろう。

また、現在の須弥壇の上面の框には、須弥壇の奥行きを作り直して拡張した棧の痕跡があり、外壁面には貫穴痕跡が残る。すなわち中古段階で少なくとも一度は、今より浅い出の張出しであった可能性が高い。このような復原考察の結果、背面張出し部がなく、須弥壇および厨子が堂内に納められた当初形態→堂の背面に出の浅い張出しをもうけ、須弥壇と厨子を移動した中古段階→現状、の過程をたどって変遷してきたと推定されるのである。室内でかなりのスペースをとっていた須弥壇と厨子を後方に移動することで空間を広げ、室内での参拝が可能になった。これに伴い、角柱をたて、渦・若葉彫刻の虹梁と拳鼻を後補として取り付け、内廻りの内法長押を交換したと推察される。現在、十谷七面堂は妙長寺との関係が切れており、改造・修理を行った時期についての史料は見いだしなかった。

ここで得られた貴重な知見は、当初は七面天女像を納めた厨子を一問四方の堂内に納めていたと推定されることである。

図7. 十谷七面堂現状平面図

図8. 十谷七面堂中古平面図

図9. 十谷七面堂当初平面図

5-3. 早川七面堂の建築と復原

早川町大原野は、富士川の支流である早川にそって西に入り、溪谷を進んで途中より県道百二十号線、通称「南アルプス街道」を北上し、さらに山間の中腹に入った所にある集落である。「南アルプス街道」から大原野の集落に至る道は、つづら折れになった急峻な山道であり、七面堂は集落に至る手前の平坦地に崖を背にして、東面して立っている。

室内には厨子に納められた七面天女像が祀られ、また建物建立・再建の棟札各1枚、屋根替え3枚、七面天女像および厨子の作成を記した棟札各1枚の合計7枚が保存されている。棟札によれば、「寶暦十三次癸未天霜月十九日 當国大原野村七面宮本社建立遷宮之砌 南無七面大明神 正行院十九世日應」とあり、宝暦13年(1763)十九世日應による建立を知ることができる。さらに再建の棟札があり、「上棟札七面堂再建砌 維時文久二戌歲十一月大吉祥日 鎮守七面大明神 三十九世日孝」とあって文久2年(1862)三十九世日孝による再建を記す。この棟札には大工について「棟梁 西河内下山宿 石川政五郎 源為豊、副匠 早川村 桂原源四郎 源省堅」と書かれ、現在の建築が文久二年に下山大工を棟梁として再建されたものであることを理解できる。また十九世日應、三十九世日孝は身延塔頭である武井坊正行院の住持であり、早川七面堂あるいは大原野集落との関係の深さが窺える。村民の名は、再建の棟札に「當村中」として名主をはじめ、杣棟梁、木挽棟梁ら二十名ほどの記名がある。

屋根替えについては、明治25年(1892)、昭和26年(1951)、昭和40年の各棟札が残る。このうち明治25年は茅屋根の葺替え、昭和26年は「大工請負人 深澤宗清、瓦請負人 中巨摩郡三恵村加賀美 五味豊太郎」とあって、瓦の産地で知られる加賀美から瓦請負人が呼ばれており、茅屋根から瓦に葺き替えたことを知る。続く昭和40年はその瓦屋根から、現在の鉄板葺き屋根(長尺鉄板瓦棒葺き)に改修した際の記録である。したがって、早川七面堂の屋根は茅→瓦→鉄板と、屋根葺材が変化してきたことがわかる。

本尊である七面天女像は七面堂の再建の二年後、文久四年(一八六四)に作成されており、棟札には「別當 西谷玄講主日源」、および「当社開闢身延塔中武井房 正行院日遵上人 最初勧請尊像也 妙應山二十九代 日信」とある。ここで初めて大原野集落の妙応山建長寺の住持名が読みとれる。また宮殿、すなわち天女像の厨子については同じ別當日源の名があり、明治六年(一八七三)に新倉村の川口直作を棟梁として作成されたものであることを知る。

本殿は現在鉄板葺、中古(昭和26~40年)瓦葺、当初茅葺で、入母屋造り平入りの三間仏堂である。正面に一間向拝を持ち、室内は後方二間内陣・前方一間外陣の形式をとる。実肘木つきの三手先尾垂木付組物を用い、平で二段、隅で三段の尾垂木を設け、台輪をめぐらし、隅柱には禅宗様木鼻が設けられている。中備は外回りが詰組、内廻りが出三斗である。向拝中備には龍と宝珠が彫られている。

内部の天井は内陣が折上格天井で花・鳥・龍・書物・車が描かれ、外陣の鏡天井には中央に龍と雲、脇の間に各々飛龍が描かれている。外陣の天井画には中央間の端に「明治十三辰二月 湯嶋邨 湯本録朗 六十六年」とあって、明治13年(1880)に描かれたものとわかる。

早川七面堂においても他2棟の七面堂と同様、須弥壇の周囲に後世の改造を見ることができる。来迎柱上には渦と若葉彫刻のついた虹梁が架けられ、背面の柱からも梁が渡されてきて、来迎柱上で交差する。交差部には獅子鼻と拳鼻が設けられており、あきらかに須弥壇を強調する造りになっている。ところが、これらの虹梁は内陣の格天井の下に位置しており、しかも格天井の格子とは無関係な位置に設けられている。前述の通り、格天井内の文様は明治13年に塗り直されたと考えられ、その下に虹梁が渡されているから、須弥壇周囲に虹梁を設けたのは、この時期以後、あきらかに近代に入ってからのものである。また須弥壇後ろ、七面堂背面後部の縁には階段を取り付けた痕跡があり、当初はここに階段があったと推定される。すなわち十谷七面堂と同様、早川七面堂も須弥壇周囲に改造が集中している。

写真8. 早川七面堂 外観

写真9. 早川七面堂の棟札

写真10. 早川七面堂 格天井と虹梁のとりあい

図10. 早川七面堂 正面立面図

図11. 早川七面堂 現状平面図

図12. 早川七面堂 復原平面図

の地形から形成される宗教世界を、在郷七面堂建築においても象徴したものと考えられるであろう。

(4)彫刻の主題に関して、第二には七面神の象徴としての植物文である沢瀉(さざなみ)を挙げられる。調査対象建築としては、明神七面堂の厨子扉に見られるのみであったが、鬼子母神厨子扉に付けられた柘榴同様、厨子が閉ざされている際にも七面神の存在を伺うことのできる文様であるといえる。

(5)建築彫刻および絵画装飾の主題に関しては、第三に龍を挙げられる。龍は近世社寺の彫刻主題としてはありふれたものであるが、七面堂建築の龍彫刻は、雲・波をともなって豊潤に用いられているといえる。もっとも彫刻の少ない早川七面堂にも、向拝上部に龍の彫物があり、明治期には外陣天井に龍と飛龍の絵が描かれている。これは七面天女が龍の化身であることをなぞらえたものであろう。明神七面堂の向拝の水引虹梁上に龍彫刻があり、明神および十谷七面堂の尾垂木の彫刻題材としても使用されている。また、支輪彫刻は明神および十谷とも雲および波であり、龍を意識したものと考えられる。

(6)明神七面堂が宝暦、十谷および早川七面堂が文久の建築であるが、宝暦の明神七面堂が彫刻を多用して装飾性が高く、反面早川七面堂は宝暦の前身建築を失った後、文久に再建した復古調の建築であるといえてよく、これら3棟の時代的な差異はあまり感じられない。ひとつには明神七面堂が身延山の宮大工、池上氏による本格的な建築であって先進性が高いことに理由があるのであろう。特に早川七面堂を請け負った下山大工は身延山の宮大工(池上氏)によって建築的な影響を受けた大工であると推察されている。

7-4. 改造の傾向 屋根の葺替や部分的な補修を除くと、3棟の事例とも、改造は須弥壇廻り、および背面の縁に集中している。十谷七面堂は当初は一間四方の堂内に厨子を納めていたと推察されるが、後ろの縁に張出し部を突出させ、厨子は張出し部分に納め、堂内に畳を敷き詰めた。

早川七面堂も須弥壇廻りに改造が見られ、来迎柱上の虹梁は格天井とのとりあいから推察すると、後補ではないかと推定される。また理由はわからないが、当初存在した背面の階段を失っている。

内部の改造の最も少ないのが明神七面堂であるが、側面後部にある連子窓をふさいで、壁として使用している。明神七面堂は縁先回りに建築を保護するための外周壁と建具を設けており、縁床も改造しているが、これらは建物を傷ませないための措置である。

なお身延山総門など、身延地域の日蓮宗関連文化財建築の実測調査の結果については、稿を改めて報告する予定である。

本研究を進めるにあたり、山梨県史編さん専門委員の羽中田壮雄氏、教育委員会県史編さん担当林陽一郎氏にいろいろな点でご教示いただいた。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

後註

- 1) 本研究は山梨県教育庁学術文化課編「山梨県史研究」第4号(平成8年3月)において「南巨摩郡における七面堂建築について」(渡辺洋子・古川哲雄)と題して部内発表した内容に対し、その後の補足調査で得られた知見を含めて、大幅に加筆・修正したものである。
山梨県の近世社寺に関する報告書としては、早稲田大学建築史研究室による「山梨県の近世社寺建築」(山梨県教育委員会、昭和58年)がある。本研究で実測調査を行ったうち、明神七面堂については、同書183頁に記載があり、参考にした。
- 2) 江戸では本所の最教寺、高田の亮朝院など。江戸の七面堂に関する先行研究としては中尾堯「七面山の信仰」中、五、江戸市中の七面信仰(鈴木昭英編「富士・御嶽と中部霊山」(山岳宗教史研究叢書 9)所収、97~118頁、五章

- は113~116頁、昭和53年、名著出版)があり、依拠した。
- 3) 京都では上京の妙顕寺など。日蓮宗の伽藍と建築に関する研究としては丹羽博亨氏による一連の研究が知られるが、ここでは同氏の「近世京都日蓮宗妙顕寺、妙覚寺、要法寺の伽藍配置」(日本建築学会計画系論文報告集 第402号、1989年8月)を参考とした。
 - 4) 本稿で在郷と呼ぶのは、近世の三都や藩都(各域下)などの都市域を離れた農山漁村の地域を指す。特に南巨摩郡の農山村地域は七面山本社が近く、七面信仰の盛んな地域であった。なお、七面山本社および本研究で実測対象とした三棟に加え、山梨県下で現存する近世七面堂建築として以下が挙げられる。
櫛形町町指定文化財 七面明神社本殿(中巨摩郡櫛形町下市之瀬)
弘円寺七面堂 宝暦6年(1756)建立 (南巨摩郡宮沢町福士平)
弘円寺七面堂については前掲註1)文獻199頁に記載がある。
また建築ではなく彫刻であるが、南巨摩郡中富町西島の円妙寺の七面堂龍および中富町手打沢の妙光寺の七面天女像が、それぞれ中富町の町指定文化財に指定されている。
 - 5) 妙詮寺は「甲斐国志」(1805~14編纂)によると、七面堂があると記録される(表1)寺院の一つであった。しかし同寺の七面堂は第二次世界大戦で焼失し、現在は本堂に七面神を祀っている。
 - 6) 中尾堯氏の註2 前掲書115頁によると、近世江戸の浅草新寺町正覚寺も土蔵造りであったとされる。なお日蓮宗諸神の堂宇として、甲州では三十番神堂などに流造りのものが存在するが、流造りなどの形態の七面堂(七面明神社)は、これまでの山梨県下の調査で管見に入らない。
 - 7) 註2 前掲書97~118頁。
 - 8) 本研究では林是替「身延山久遠寺史研究」所収の「日唱の身延除障事件」(96~106頁)「七面山」(300~304頁)を主として参考とした。平成5年、平楽寺書店。
 - 9) 「身延町誌」身延町誌編纂委員会編、昭和45年、サンニチ印刷。
 - 10) この火出では参詣の信者も多数死傷し、これを契機として身延貢主日唱は七面大明神を邪神と称した(七面邪神説)とされ、西谷塚林との間で騒動に発展する。結果、日唱は平死し、身延の歴史を除かれた。これを「除障唱師事件」と呼んでいる。
 - 11) 丹羽博亨「日蓮の教義・行儀と伽藍観 初期日蓮教団寺院における伽藍と建築(その1)」日本建築学会論文報告集 第343号 1984.9月
同「直弟子にみる日蓮の伽藍観の継承と発展 初期日蓮教団寺院における伽藍と建築(その2)」日本建築学会論文報告集 第347号 1985.1月
 - 12) 宮崎英修「鬼子母神信仰の研究」(「鬼子母神信仰」民衆宗教史叢書 9巻所収) 255~373頁、1985年、雄山閣。
 - 13) 註2 前掲書100~103頁。
 - 14) 身延文庫蔵。
 - 15) なお、境内奥の影龜石に祀られた本殿と拝殿は宝暦11年(1761)、身延四十二世日辰の代の再建であるが、その費用を施入したのは河内領宮原村(現在の南巨摩郡六郷町宮原)の村民たちであった。宝暦年間には南巨摩郡を中心として各村落に七面堂建築が建設され始めた時期と考えられるが、この宮原村のように七面信仰の本拠地に堂宮建築を寄進することも、ほぼ同時期に行われている。この宮は明治11年(1878)~36年にかけて修築されたが、現在も宮原部落を檀家圏とする定林寺と大定寺の住職が交替して管理を続けている。
 - 16) 寛政5年(1793)深見要言による「身延山図絵」(山梨県立図書館、甲州文庫蔵)に描かれた七面山本社は「天都宮」および「天妃廟」とあり、前者が本社、の拝殿、後者が本殿に相当する。拝殿(天都宮)は平入り入母屋造りで、正面に唐破風の向拝があることが読みとれる。本殿(天女祠)は妻入り入母屋屋根の形に描かれている。「身延山図絵」は作成年代からすると安永大火後の再建本社を描いたものと考えられるが、現在の七面山本社と屋根の形が異なる表現になっており、千鳥破風を欠く。「身延山図絵」と作成年代が比較的近いと考えられる「身延山図画」や、波木井織部による「身延山絵図」(いずれも山梨県立図書館、甲州文庫蔵)においても、本社建築は「身延山図絵」と同様、千鳥破風を欠くため、屋根が十字形ではない姿に描かれている。千鳥破風のない建築表現は近代に入ってから「改正身延山全図」(明治24年、川口駒版権)も同じであるので、絵としての表現である可能性が高い。
 - 17) 「建築大辞典」643頁、昭和51年、彰国社。
 - 18) 本稿では内閣文庫所蔵「献進本甲斐国志」を底本とする「大日本地誌体系 甲斐国志 第三巻」雄山閣、1971年に拠った。
 - 19) 井上審「諏沢七面堂の建築」昭和10年6月。当時、山梨県史蹟名勝天然記念物の調査委員であった仁科義男氏および山梨県師範学校の歴史科教諭、桂川七郎氏が、明神町の七面堂管理者の人々に依頼されて、調査した記録である。
 - 20) 聞き取りは、現在明神七面堂を管理している、諏沢町の嶋田八郎氏(現諏沢町文化財審議会委員)、秋山源一郎氏に対しておこなった。
 - 21) 「感応寺 由緒及財産調査」明治30年6月。
 - 22) 十谷七面堂の傍らに建てられた諏沢町教育委員会による解説文など。
 - 23) 七面堂建築の実測調査のほかに、鬼子母神堂の調査を東京大学大学院生(博士課程)、山之内誠氏の協力を得て、平成8年度に実施した。
 - 24) 「諏沢町誌」第四編富士川水運、諏沢町誌編纂委員会、平成8年3月。
 - 25) 諏沢町秋山育彦家文書、宝暦13年(1763)3月3日付「乍恐書付を以願上申候」によれば、この年3月朔日夜、船頭たちが七面堂で舟運業に関する重要な会合を開いたことが知られている。
 - 26) 註2 前掲書による中尾氏の指摘では、江戸における七面信仰の事例は七面山のミニチュア化であるとされており、この事情については、江戸市中の寺院も南巨摩郡の在郷寺院もまったく同じである。むしろ、身延山の膝元と言ってもよい南巨摩郡においては、渓谷沿いの集落立地と、その後山としての難形「七面山」を得る地形条件には非常に恵まれていたといえてよいだろう。
 - 27) 但し十二支は近世社寺建築の墓股彫刻としては比較よく用いられる画題であり、山梨県下では、津金町の海岸寺観音堂などがその事例である。さらに事例を調べることで、方位神と七面神を配る建築の関係をより明らかにする必要があるだろう。

(1996年7月10日原稿受理、1996年12月16日採用決定)